

「腸内環境デザイン」グループ
中間評価報告書

日 時： 令和5年9月 20 日(水) 9:30～11:30

場 所： WEB による委員会

委 員： 大谷 直子 大阪公立大学大学院 病態生理学 教授
坂田 恒昭 大阪大学 共創機構 特任教授
中島 淳 横浜市立大学 医学部肝胆脾消化器病学教室 主任教授、診療部長
松木 隆広 株式会社ヤクルト本社 中央研究所基盤研究所 室長

報告者： 福田 真嗣 「腸内環境デザイン」グループ グループリーダー

上記の日時場所において評価委員会を開催し、事前に提出を受けた当該事業に関する報告書などを踏まえ、グループリーダーによる成果報告と自己評価説明並びに事務局より特許・決算状況の説明を受け、その内容に関連した質疑応答を行った。これらをもとに委員の間で意見交換を行い、評価結果を以下に取りまとめた。

【総評】

福田リーダーは腸内細菌叢の分野でオピニオンリーダーとして活躍しており、本研究課題における成果においても最先端の研究も取り入れており、さらには海外との共同研究を進める準備を始めており、素晴らしいものがある。

アレルギー疾患関連の医薬・診断薬への社会実装に関しては、今後ステージが進むにつれて臨床研究・臨床試験などの数多くのハードルがあるが臨床現場を熟知した KOL と密にコンタクトを取りながら、適切な対象疾患を選択し、今後解析していく必要がある。腸内細菌の作用に注目しているので、食物アレルギーを対象とできる可能性があると考えますが、IgE が関連する疾患を十分に調べて疾患モデルを絞る必要がある。腸管免疫やアレルギーの専門家との共同研究を展開するのがよいと思われる。

潰瘍性大腸炎に関しては、世界中で数多くの研究がなされているが、本研究を発展させてゲームチェンジングとなるような治療法になる可能性があるため、今後の更なる開発に努めていただきたい。また、予防という観点からの研究を含めるのが今後の方向性として妥当だと考える。例えば海外では主流である再発予防という視点から研究を進めても良いのではないかと考える。潰瘍性大腸炎に対する FMT は、国内外のグループも、先行的に多く参加している。したがって、先行グループを超えた取り組みを実施する必要がある。福田リーダーの得意分野であるメタボローム解析も実施しメカニズムを明らかにし、それに基づいた、トライアルを期待する。また骨髄の多能性幹細胞の腸管リンパ節

へのリクルートのメカニズム解明も新たな治療法開発には大きく役立つと考える。さらには移植細菌の腸内定着という事も考えて栄養学の知見も取り入れて行く必要がある。本分野も臨床現場を熟知した KOL と密にコンタクトを取る必要があると考える。

COVID-19 の重症度との関連性に関しては SNP を含めたゲノム解析等を含むコホート研究が期待される。

以上総論として本研究課題は福田リーダーの指導により問題なく進められており、大きな成果を得られつつあると判断できる。今後の進展に期待したい。

【各論】

【研究成果】

既にアレルギー疾患の治療薬となりうる物質を対象とした特許出願も済ませている。また多くの共同研究も行われており、学会発表も多くなされている。潰瘍性大腸炎に関しては今後の発展が期待できるメカニズムの解明を進めつつある。本研究も多くの共同研究も行われており、学会発表も多くなされている。

【研究の方向性】

多方面にわたる研究成果により社会実装へのシーズは十分にあると考える。今後は更なるゲームチェンジャーとなる医療法の開発を期待する。

【研究費・人員体制について】

運営については科研費などの外部資金獲得や学会発表、特許出願もされており、問題なく進められたと認識している。

令和5年9月 20 日

委員長

坂田 恒昭 